学 会 名	学会名　第60回日本リハビリテーション医学会学術集会 （ 令和5年6月29日～7月2日）
研究テーマ	回復期リハビリテーション病棟における9単位/日を超えるリハビリテーション介入の効果
病 院 名	医療法人社団健育会　ねりま健育会病院
演　　者	〇二瓶太志，大村優慈[1)]，酒向正春 [1)]湘南医療大学　保健医療学部

概　　要

【目的】
回復期リハビリテーション病棟における9単位/日を超えるリハビリテーション介入が患者の心身機能や病棟ADLに与える効果を明らかにすること.
【方法】
回復期リハビリテーション病棟入院患者を対象に，9単位/日を上限とした2021年10月を通常期（88名，80±12歳，8.9±0.7単位/日：PT4.6±1.2単位/日，OT3.1±0.4単位/日，ST1.2±1.3単位/日），9単位/日を超えるリハビリテーション医療を提供した12月を超過期（91名，77±14歳，9.6±0.9単位/日：PT5.0±1.2単位/日，OT3.4±0.6単位/日，ST1.2±1.2単位/日）とし，前月からの握力，MMSE，FMA上肢，FMA下肢，BBS，30秒立ち上がりテスト（CS-30），運動FIM，認知FIMの変化量を通常期と超過期の間で比較した.
【結果】
CS-30のみ通常期よりも超過期で有意に増加した（0.6±2.5回vs1.8±3.9回）．その他の項目の変化量は通常期と超過期の間に有意差はなかったが，BBSの変化量が通常期4.9±7.4，超過期6.0±8.4，運動FIMの変化量が通常9.6±13.1，超過期11.6±14.8で増加傾向がみられた.
【考察】
回復期リハビリテーション病棟において9単位を超えるリハビリテーション医療を提供することでCS-30が向上しており，運動量増加のための介入が増え，体力が向上したと考えられた．バランス機能と病棟ADLにも向上傾向はみられたが，明確な効果を示すには至らなかった．川原らは訓練増加がADL改善に有効と述べているが，本研究では通常期と超過期の提供単位数差は0.7単位にとどまっており，病棟ADL向上に対する介入を大きく増加させるには至らなかった可能性が考えられた.